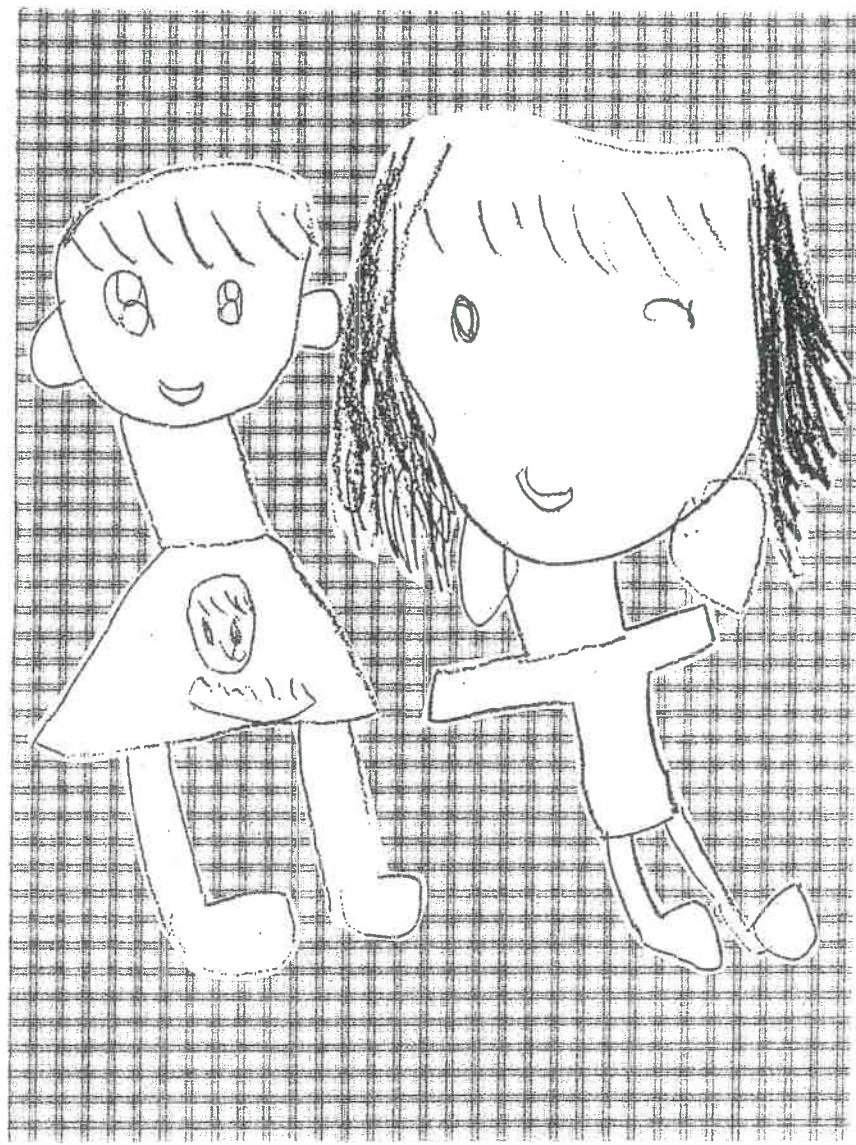
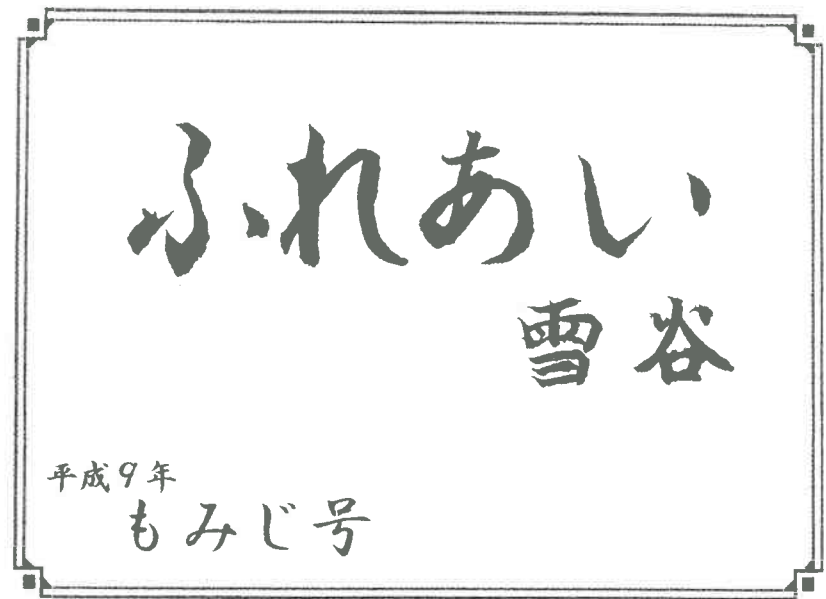
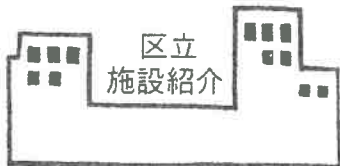




上池台保育園園児（4歳）の作品

上池台保育園 —豊かな感性をもった人に—



静かな高台の住宅地の中に建てられた上池台保育園は、晴れた日には屋上から、山頂に雪化粧をした富士山がくっきりと浮かんで見える、たいへん環境の良い所にあります。

昭和47年8月1日に、定員130名、8か月以上の乳幼児をお預かりする保育園として開園しました。当時としては、静かな住宅地の中に賑やかな保育園が建ったので、近隣の方々には大変ご迷惑をかけたようです。スピーカー等の騒音には特に配慮をしながら、できるだけ近隣の人たちと会話を交わす中で保育園を理解して頂き、好感をもってもらえるようにして、今日の保育園があります。今後とも、地域の方々とのつながりを大切にしていきたいと思います。

保育園では、子供たちが笑ったり、泣いたり、喜んだり、怒ったり、我慢したりしながら、人間らしく育っていくよう願っています。そして、「人」として、やさしさや、思いやりがもてるよう、私たちは、ひとりひとりの個性を大切に見守り、成長への手助けをしています。

天気の良い日は、坂道の多い地域の特徴を活用して、園外保育や散歩に出かけ、体力と持久力を鍛え、春夏秋冬、身近な草花に触れさせるなどして、感性の育ちを大事にしています。

今年、児童福祉法が、50年ぶりに改正されました。保育園の役割も多様化しています。地域の中の子育て支援の施設として、子育て相談を火・木の午後から行っておりますので、どうぞ気軽にご来所ください。一緒に考えたいと思います。お待ちしております。

（上池台保育園長 日高幸子）



編集後記

平成二年十月からスタートした編集会議も、地域の方々からのご寄稿、ご協力に支えられながら百回を越え、通巻二十八号を発行することができました。

内容的には、地域の施設紹介など一巡して残り少なくなり、新しいテーマ選びが今後の課題となるでしょう。

R・Kさんのリレー随筆に、「鼻突き出し箱型の乗合バス」の傑作形容詞があつて爆笑。楽しませて頂きました。

（石川台 三浦悦次）

〔発行〕わがまち大田雪谷地区推進委員会

〔編集〕ふれあい雪谷編集委員会

連絡先 雪谷特別出張所内

大田区東雪谷四一三一二三

電話 三七二九一五一七

〔発行日〕平成九年十月一日

通巻第二十八号

まちかど

《インディアカ》の紹介

インディアカの発祥は、原住民チユロト族のインディアンが、とうもろこしの葉を束ねたもので遊んでいたものである、と伝えられています。

その後ヨーロッパに渡り、西ドイツにて用具とルールが考案

され、日本には、一九六八年に紹介されました。



対抗大会が行われています。雪谷地区においても本年一月「雪谷インディアカを楽しむ会」が発足し、雪小体育館にて毎週水曜日（予定）午後七時から行っております。

一チーム四人制。バレーボールと同じようなルールで、インディアカ（羽根）を素手で打ち合います。大人から子供まで一緒にプレーできる

楽しい競技です。地域の皆さん、是非一度体験されるよう、会員一同お待ちしております。

現在では日本インディアカ協会が組織され、愛好者人口は約六〇万といわれています。毎年全国大会が実施されていますが、大田区でも三地区による、

問合せ 電話 （会事務局 大槻生）
三七二九一二三四

散歩道

八幡坂（はちまんざか）

仲池上一丁目にある、子安八幡神社の坂下の子安橋（もと小川が流れ、橋が掛かっていた）の北側に沿って、ゆるやかなカーブのある坂を一五〇メートルほど上りきった所が頂上だ。

この坂を「八幡坂」としたのは、八幡神社の由来にちなんだ由。私がこの地に引越して四十年ほどになる。当時は大森区上池上町といっていた。八幡神社と林昌寺の森が、こんもりと茂っていた。

周辺は麦と野菜畑で、旧家の大きな屋敷と、新しく転入してきた方の新築の家が点在する閑

静なところであつた。

坂道は、赤土に小砂利を敷きつめた

だけで、降雨雪のときは足をすべらせて、つらい思いをした。

秋祭りになると、若い衆が半纏姿で、神輿をかつぎ、ワイショ、ワイショの掛け声で坂道を登ってくる。子供たちが、親につきそわれて、山車の太鼓をドン、ドンと打ちながら、よいしょ、よいしょで綱を引いて坂を上がってくるなど、ほほえましいものでした。

いつまでも、平和な美しい街、思い出の坂道でありたい。



（上池上 富田信平）

洗足流れ鯉物語

洗足池から流れる小さな流水にそって、春には桜の花、夏には緑の葉、そして秋には紅葉と、付近の住民や通行人の目を楽しませてくれています。荏原病院下の流れには、沢山の鯉がいて、子供達やお年寄りの、散歩の途中の憩いの場になっています。

お世話をしている方にいろいろ伺ってみました。

鯉が沢山いますが・・・

住民有志の方達がポケットマネーで求めたり、また自分の家で飼っていたのを仲間に入れたりして増えました。

餌はどうしていますか・・・

川なので流れないように、沈む養殖用の餌を用意しているのですが費用がかかります。

水草が沢山ありますが・・・

いろいろな水草があるのですが、春には、セリ、クレソン等がいっぱい採れますので、近所の人達で収穫して、みんなにおすそ分けします。

鯉の他どんなものがありますか・・・

カメ、スッポン、もずくがに、ざりがに、鮎、はや、たなご、口ぼそ、貝類では、あら貝、どぶ貝、まつかさ貝、烏貝等です。

雨量が多いときは・・・

湧き水が3ヶ所ありますので、ポンプで調節しています。

何か困ることはありませんか・・・

屋には白鷺、夜には五位鷺がきて小さな魚たちを食べてしまうこと。ブラックバスやブルーギルを流れに放されること。たばこの吸殻等のゴミを捨てられることです。

しかし上流の方と違って、鯉のお陰で、割合にゴミが少ないような気がします。

気候もよくなりました。読者の皆さん、私達の町の中にこんな憩いの場があります。是非御家族で、またお友達を誘って、行ってみてはいかがでしょうか。

鯉のほかに珍しい小鳥にも会うことができますよ。

(東中 直井稔枝)

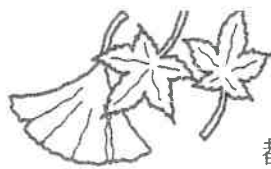
雪谷文化センター行事のご案内

11月29日(土)・30日(日)

雪谷文化センターと利用者の会が力をあわせ、「つどい」を開催します。日頃のサークル学習成果の発表や体験コーナー、地域との交流を広げる「お祭りひろば」など予定しています。

皆さん一緒に楽しみませんか。

雪谷文化センターのつどい実行委員会



荏原病院憩いの場

都立荏原病院は、3年前新築されました。

その敷地の約4分の1(西方に面した所)程に当病院の患者さん、見舞客、従業員の方々等の通勤路を兼ねたちょっとした「いこい」の場所があります。私達は殆ど毎日のように、冬は昼間、夏は夜分ここを散歩路にしています。

手を大きく広げたような大木の枝には、時として音色の違った鳥のさえずりが聞こえ、桜をはじめくちなし、どうだんつつじ、さざんか、花みづき等、季節を知らせるように花が咲き、去年坊主に刈りとられた萩が、今年も房々と生え繁っております。また、落ちている大輪の椿を拾ってきて、ガラスのお皿に並べて楽しんだりもしました。少しくだった所にある、ライトに浮きぼりにされた“もみじ”のすっきり立っている様子は、私達の目に初々しい乙女のように可愛らしく見えます。

この季節清々しい夜空を、そして近辺の夜景を眺めていると、昼間のけたたましい騒音から逃れ、ホッとした気分になれます。

一刻のやすらぎが明日への活力となる静かなこの場所を、何時までも残してもらいたいと思います。

(池の台 大恵芳子)



ヒロード草のおいたち

私が雪谷のお使いの帰り道、いつも通る所を帰らないで、違った道を歩いていると、お婆さんが草花の鉢を捨てるところでした。私はそれを「下さい」とお願いしました。

お婆さんに「捨てる花を持って行っても駄目ですよ」と言われましたが、もらって家に帰り、すぐ植えました。一か月たっても枯れたままでした。いつしか忘れてそのままにしておきました。

ふと見た時に生き返っておりました。

その年の6月に牡丹色の花が咲きました。とてもうれしくなりました。

今はよそにお嫁にいつて、花を咲かせています。助けてあげてよかったと思います。

不思議なことだと思ひます。

(南雪谷 斉藤さよ)

訂正とお詫び

7月1日付『あさがお号』リレー随筆の「お稲荷さま」の記事で、3行目「その本殿の雪谷稲荷は」とあるのは、「その本殿脇の末社雪谷稲荷は」の誤りでした。

訂正してお詫びいたします。



自治会リレー随筆

新大田区百景展を観て

新大田区百景展を、私も絵描きで出展画家に知人も多く、懐旧の情やみがたい思いで参観いたしました。

荏原病院通りは、昔は赤土のままの田舎道でした。荷馬車も通り、馬糞が湯気を上げていたりしました。

徐々に中央部分のみアスファルトになり、鼻突き出し箱型の乗合バスが通うようになり、停留所でもなくても手を上げるとその場で乗せ、途中でも降ろしてくれました。別居していた祖母が、停留所から程遠い我が家前から随時、乗り降りしていたのが懐かしいです。

私は、5、6才の頃より1才の弟を背負わされ、子守をいたしました。重くてじっと家の前に立っていると、深編笠をかぶった虚無僧が尺八を吹いて門付けをしに来ました。怖くて家へ駆け込み、上り ^{かまち} 框 ^{ひざ} に膝をぶつけて大怪我をし、今でも右膝に傷痕が残っています。

今、東雪谷会館になっている所は、巡査駐在所で、その一人娘さんは、私の同級生でまだお付き合いしています。当時は珍しい4人乗りのブランコや三輪車があって、毎日のように遊びに行っていた思い出話を二人で楽しくいたします。

裏通りに行くと多摩川の花火がよく見えました。遠いので音は全く聞こえず、昔は東京の街も暗く、漆黒の夜空に色とりどりの花の輪が、ふわりと浮き、スーッと消えて、それはそれは綺麗でした。やはり、一番激烈な思い出は、戦争中、我が家の裏畑に ^{しょういさん} 焼夷弾 が落ち、父と必死に消し止めた事です。

現在、雪谷で仕事をいたしていますが、近く思い出深い東雪谷に帰住する所存であります。

(R. K)



俳句

秋時雨

南部片富士 大樹海

不來方や

のぼり尽たる 萬紅葉

香の籠る

古武士が守る 菊花展

ぽっかりと

口開く空 秋刀魚焼く

虹鱒の

跳ねて秋思を 深くせり

古寺の

扉閉ざせる 萩の庭

(小池 鈴木 美香)

